仏教企画通信

発行日｜令和5年3月1日　71号

発行所｜有限会社 仏教企画
〒252-0116
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
Tel. 042-703-8641
Fax.042-782-5117

発行人｜有限会社 仏教企画代表　藤木隆宣

Email｜fujiki@water.ocn.ne.jp

「待つ」ことの価値を考える

待たない社会の問題点

内山節

機が熟するのを「待つ」

仏教は悟りを開くことに終着点をみいだす思想だといってもよい。だが、その困難さも私たちは知っている。なぜ難しいのかといえば、悟りを開きたいと思っているかぎり、悟りは開けないからである。悟りを開きたいという思いもまた欲望であり、煩悩にすぎない。それは自我が求めているものである。煩悩の消滅とは自我の消滅であり、何者でもない吾（われ）、すなわち概念でとらえることのできない吾が現れたとき、おそらく自我は消え去っているのだろう。

私たちは自我を消滅させるために「行」に入ることはできる。だが悟りを求めて「行」をしているかぎり悟りは開けない。手に入れようとしているかぎり、手に入らないのである。「行」のなかで、自我が消滅していくときを待たなければならない。

仏教は、「待つ」ことを柱のひとつにおいた思想である。悟りはそれが開けるときを待たなければならない。仮に極楽があるとしても、自分の力で極楽に往くことはできない。極楽往生のときを待たなければならないのである。そしてこの思想は、伝統的社会で暮らす日本の人々には納得のいくものだった。なぜなら自分たちの仕事や暮らしのなかに、さまざまなかたちで「待つ」ということが内蔵されていたからである。

田植えをするためには、田植えができるときを待たなければならない。稲刈りをするには、稲穂が垂れるときを待たなければならない。伝統社会においては、待つことによって成立している時空のなかに生死の世界があった。そしてそれは、自然とともに生きた人々の思想でもある。自然とともに暮らそうとするなら、自然がそのときをつくりだすのを待たなければならない。山菜が芽を出すときを待ち、茸がでてくるときを待つ。春を待ち、夏を待ち、秋を待つ。自然とともに暮らすとはそういうことでもある。

そして、そういう生き方をしている人々の世界には、いたるところに待つという世界があった。酒、醤油も味噌、漬け物といったものも発酵するときを待たなければ完成しないし、かつては鮓（すし）も熟（な）れ鮓が一般的だった。今日でも地域の食としてはハタハタ鮓、かぶら鮓、鮒鮓といった発酵させた鮓がつくられている。

農民だけではなく、漁師たちも魚の群れが現れるときを待っていた。親たちは子どもが大人になるときを待ち、病気になれば病気が治って元気になるときを待った。そして最終的には死が訪れるときを待つ。昔はお迎えがくるのを待つという心情が、広く存在していたものだった。

といっても、待つとは何もしないでいるということではない。第一に、待てる態勢をつくっていなければならない。第二に、そのときがきたらただちに行動する準備を整えておく必要がある。春になって農業を再開できるときを待つためには、冬を乗り切る態勢を整備しておく必要がある。寒い地域では冬の備蓄野菜としてさまざまな漬け物がつくられ、秋の終わりにはどこの家でも薪が積み上げられていた。穀類やイモ類なども保存され、私の村の家がある群馬県上野村では、五十年ほど前だと地面に穴を掘って中に藁などを入れ、そこで大根や白菜を保存したものだった。もちろん漬け物もつくっていたが、沢庵を漬けると余ってしまう大根葉は干して乾燥させ、冬の料理に利用していた。さらに冬の仕事として、いろいろな地域で竹籠をつくったり、竹のない地域ではマタタビやヤマブドウの蔓や皮を用いた細工物がつくられていた。越後杜氏や南部杜氏のように、冬には毎年出かけていく場所をもっている人々もいた。

そういう態勢がつくられていたから、伝統社会の人々は春を待つことができたのである。そして春が訪れれば、人々は田起しをし、苗代をつくり、用水路の整備などをすすめて、たちまち田植えに向かう活動を活発化させていった。待つことのできる態勢をつくりだし、そのときがきたらただちに動ける準備をしている。そのことがあるからこそ、人々は待つ生き方をすることができた。

お迎えがくるときを待つのも同じことだ。何度となく親族や地域のなくなった人たちを見送り、仏とも結ばれた暮らしをしていることが待つ態勢をつくりだし、お迎えがくるときを待つことができた。

「待つ」ことのできる態勢の確立

いまこんなことを述べてきたのは、今日の対立の時代と、待つことを失った時代とが関係しているように感じられるからである。もしも私たちだけの都合ですべてを決めてかまわないというのなら、日本は絶対平和主義でいくのがいいに決まっている。理想としては軍備ももたず、他国とも争わないでいられれば、それにこしたことはない。だが今日の世界の情勢はそういう考え方をあざ笑うかのごとくである。ロシアによるウクライナ侵略はなおつづいている。アメリカは中東地域に度々軍を派遣してきた。日本の周囲には中国、北朝鮮といった国が存在する。中国は台湾への武力侵攻を、選択肢のひとつだと公然と宣言している。そういう状況のなかで私たちはどうすればよいのか。

今日では日本も軍事力の増強をはかろうとしている。ところが軍事力の増強は、日本だけがおこなうわけではない。それは、東アジア地域での軍拡競争になってしまうだろう。いわばそれは愚策なのである。だが愚策だと分かっていても、それなら中国などとどう向き合っていったらよいのか。

ここで大事なことは、いまの東アジアの状況と向き合う思想をもつことである。相手が軍事力を増強するならこちらも増強するというだけなら、ここにはなんの思想もない。それでは危険なパワーゲームになってしまう。とするといま必要な思想とは何なのか。

私はそれは「待つ」思想なのだと思っている。

中国も北朝鮮もロシアも、現在の体制が壊れるときがくるだろう。ロシアのプーチン体制は、すでにほころびを顕在化させている。中国も極端な監視社会をつくって異論のだせない国家を成立させているが、このかたちをこれからも維持しつづけるのは、どこかで壁に突き当たるだろう。北朝鮮も同じである。東アジアの安定を確立するためには、そのときを待つほかないのである。

ただし待つためには、待てる態勢を確立しておかなければならない。とするとここで

の待てる態勢とは何なのか。軍事力もその要素のひとつに含まれるのかもしれない。ただしその場合でも、相手に対抗して軍備の拡充をはかるのと、そのときを待つために、すなわちそれまで戦争を起こさないようにするために軍事力を考えるのとでは、軍備の内容が変わってくるだろう。アメリカの軍事力をコピーするような拡充ではなく、つまりアメリカ型の勝つための軍事力ではなく、日本列島を攻撃させない軍事力とはどうあったらよいのかの検討が必要なのである。

さらに中国、北朝鮮、ロシア以外の周辺国との協調態勢をどうつくるのか、経済の領域ではそれらの国々といかなる連携体制をつくるのか、さらに中国、北朝鮮、ロシアともどのような経済関係をつくることが抑止力として機能するのか。そして欧米を含む全世界とはどのような連携をするのがよいのか。そういうことをとおして「待つ」ことのできる態勢を確立することが重要なのである。

とともに中国や北朝鮮、ロシアで体制が変化したとき、どうしたらよいのかという準備をしておくことも重要である。それらの国々の体制が瓦解しても、その結果ますます緊張の高まる世界が生まれてくる可能性もある。中国で体制が動揺すれば、チベット、ウイグル、内蒙古などでは独立をめざす動きが生まれてくるかもしれないし、ロシアでもいまの体制が瓦解すれば、地域独立やそれに伴う内戦が勃発するかもしれない。そういうこともふくめたあらゆる可能性を検討し、それでもなお動ける準備をしておかなければならないのである。

「待つ」思想とは、待てる態勢をつくりだし、そのときがきたら動ける準備をすることによって成立する思想である。

訪れを「待つ」

群馬県上野村にある私の村の家からは、いまは冬の山だけがみえている。この村は太平洋系の気候で、雪はあまり降らない。ただし私の家は標高600メートルの集落にあるから、夜になれば気温は下がってくる。

庭にはヤマガラ、ジョウビタキ、メジロといった小鳥がよくやってくる。山の景色と庭に来る小鳥たちの様子をみていたとき、自然の生き物はみな春がくるのを待っているのだと感じた。葉を落とした山の木々は針金のような枝をみせ、春がくるのを待っている。小鳥たちも同じだ。といっても自然の生き物たちは待てる態勢をつくっている。春を待つうちに枯れる木もないし、命を落とす小鳥もいない。そして春がくれば、春の営みを開始する。それができるのは冬の間に春の準備を怠らなかったからだ。山の木々は枝の先に冬芽を付けて、葉を伸ばす準備をしている。おそらく小鳥たちも巣をつくり卵を温める準備をしているのだろう。

そんな自然の様子をみていたときに、私たちはもう一度「待つ」ことの意味をとらえなおさなければいけないという気持ちになった。考えてみればかつて伝統社会で暮らした人々は、さまざまな待つ時間をもちながらに生きていた。そして仏教もまた待つ思想とともにあった。待つ思想を共有していたがゆえに、伝統社会の人々にとっては、仏教は納得のいく思想だったのかもしれない。悟りを開けるときを待つ、成仏できるときを待つ。インドの仏教では死がイコール成仏ではないが、日本では死者はよほどのことがないかぎり、成仏するものとしてとらえられていた。死を訪れるもの、訪れるときを待たなければならないものとしてとらえた人々にとっては、成仏するときを待つことと死が訪れるときを待つことが同一視されていったのだろう。

冬の景色をみながらそんなことを考えていたとき、待つことに消極的な意味を与え、それどころか待つことを否定した近・現代社会の問題点をふと感じた。プーチンがロシアとウクライナの一体的世界を生みだしたかったのなら、ウクライナの人たちがそれを求めるときを待たなければ、本当の意味では実現できなかったはずだ。だが彼はそのときがくるのを待とうとはせず、軍事力によって併合しようとした。「待つ」の反対語は打って出るとか仕掛けるになるのだろうが、プーチンはまさに仕掛けていまの事態を生んだのである。

中国が台湾と一体になりたいのなら、台湾の人々がそれを望むようになるときを待たなければ本当には実現できない。中国が世界から尊敬される指導者になりたいのなら、世界の人々がそれを望むときを待たなければならない。だがいまの中国は力で世界を屈服させ、世界の指導者になる道を求めている。

近・現代は仕掛けていく時代をつくったのである。経済の領域でも、新しいものを仕掛け、市場の覇者になることが成功の道になった。国家は主導権争いをくり返し、不都合な国を弱体化させ、ときに滅ぼしていく仕掛けを企てている。待つことに価値をみいださない社会は、こうして対立と戦いの時代をつくりだしたのである。

私たちは無事な社会の再創造を願っている。それを実現する道には、「待つ」ことに価値を感じる思想がおかれていなければならないのかもしれない。

内山　節（うちやま たかし）
哲学者。一九七〇年代から東京と群馬県上野村の二拠点生活。元立教大学21世紀社会デザイン研究科教授。近著に『内山節著作集』（全15巻、農文協）『半市場経済 成長だけでない「共創社会」の時代』（角川新書）他多数。

宮本　私は「葬儀を夜やる」ということについてお伝えしたいと思っています。葬儀については、最近いろいろな形が出てきていますけれども、今は葬儀屋さんが主体になってきていますね。ただこれからはお坊さんが主体となって、時代に沿った形を作るべきだと私は思っています。鎌倉時代からずっと仏教、曹洞宗が栄えてきまして、（葬儀は）何ら変わりません。心は変わってはいけないと思いますが、ただ周りの生活様式が変わってきていますから、そこに合わせて葬儀のかたちも変わるべきだと私は考えています。

「葬儀を夜やる」という私の考え方は、あくまでも（参列者の）皆さまはお通夜には来られますが、翌日の葬儀には来られない方がほとんどです。それならそのお通夜の中でお葬式をやったほうがよいのではないか、ということです。

会葬というのは、葬儀に会うことで「会葬」と呼ばれるわけです。ただ、今は「会通」になっていますよね。

藤木　なるほど。ある意味では形式だけのものになっている、というわけですね。

宮本　私はこのようなかたちではよくないと考えています。葬儀に参列してこそ会葬で、亡き人を弔うのが参列者の務めです。ですから、皆さんが来られる時に皆さんが集まって、ゆっくり亡き人を偲ぶ。そして遺族を慈しむのが葬儀です。

藤木　そう思います。

宮本　曹洞宗の葬儀は本当によく出来ています。すごく理屈に合っていて、納得させられる儀式です。参列者の記憶には残ります。そこで参列者に「こんな葬儀をやってもらいたい」と思ってもらうのが大事だと思います。つまり参列者に感動を与えるかたちで葬儀をやるべきだというのが私の信念です。そのこともあって、大勢の集まる通夜に合わせて葬儀をやればいいのではないかと言ってきました。

日蓮上人も法然上人も葬儀を夜やっているのです。日蓮さんなんかは夜中の十二時にやっています。法然上人もそうです。どういう事情があったかは分かりません。でも、夜中にやっています。だから夜やることに何ら問題はありません。

藤木　そういうことなのですね。

宮本　私は五年前から宗門の重鎮や大学、先生方にこうした考えをお伝えし、意見をお聞きしてきました。すると「宮本君、それはいいことだよ。ぜひ進めていくべきだよ。私もやっていきたいと思う。」と言う方が多かったですね。

実際に夜に葬式をやって、田原市内の近くのお坊さんにご意見を伺いました。すると「宮本さん、足並みを乱すのは困るよ」と言われまして。ああ、そうかと。ただ、私は足並みを乱しているわけではなくて「こういう選択肢もあるよ」と申しているのです。

藤木　私はいいと思いますね。

宮本　参列者の皆さんが「曹洞宗の儀式っていいね、私もああいう葬式をやってもらいたい」となっていけば、宗門にとってもプラスです。

『おくりびと』と葬儀

宮本　それからやはりお坊さんは宗教的なもので人を導くだけの力量を持っていなければ、だめだと思いますね。葬儀でも、法事でも、自信を持ってやってもらいたいと思います。

私は法語でも、口語体ですけども、やはり力を込めてやります。その場の千両役者だと思って、声を大にして、抑揚も付けて。特に引導法語は最後の引導の「露」とか「喝」を、本当に心を込めて、腹の底から声を出します。人間はこの世に未練を持って、しがみついていたい。それを諭して、最後に背中をどーんと押して「安心して向こうに行きなさいよ」と送るのが葬儀の一番のクライマックスだ、と。今日は大きな声を出させていただいて、背中を押させていただきました、と。安心して向こうへ行きましたよという ことをお話する。ここが一番大事です。

藤木　素晴らしいですね。

宮本　それから、葬儀での納棺に関しては、私はいまだに納棺師に任せません。私が必ず行くようにしています。これは大事です。映画「おくりびと」で、彼ら納棺師が世に出ましたね。それで、葬儀屋さんも必ず納棺師をセットで入れるようになりました。たしかにきれいに整えて納棺してくれます。ただ納棺諷経があって、そこは納棺師の方は絶対に読めませんよ。

私は一番大事なのは納棺だと思っています。病院で亡くなればご遺体は病院できれいにしてくれますから、形としての湯かんをします。葬儀屋さんに桶とお湯を持ってきてもらいます。湯を作るのにも、普通は熱い湯に水を入れてちょうどいい温度にしますね。ところが、水に湯を入れるのを「逆さ湯」と言います。水の中に湯を入れてちょうどいい温度に作るのです。これは湯灌の湯の作り方です。そうして一つずつ説明していきます。

それから湯灌をする時の一番の主役は甥と姪ですよと。なぜかというと、昔は家で突然に亡くなることが多く、どういう死に方をしたかが分からないわけです。体を清める時に傷があるかを調べる検死の役目は、奥さんだとか本当に近しい人よりも、甥や姪のような一代おいた人の方が、冷静にできるわけです。

湯桶で清めたタオルで参会者の皆さんが順番に顔と手を拭きます。最後に奥さんが、顔と手と足（他の皆さんには顔と手だけしか拭かせない）。足は布団を被せておいて「あなたがこの家、このおばあちゃんの跡を引き継いでやってもらうんですよ。だから、最後に顔と手と足まできれいにしてあげてください」と説明するのです。

すると、生前いじめられたから「この、くそばばあ」と思っていても、その時になって涙が出るのです。「おばあちゃん、本当に私も悪いこと言ってしまったね」とか、心の中で涙ながらに足を拭いてくれるのです。そこが一番大事なところなのです。

きれいにしたところで「最初に足袋を履かせてください」と。これはなぜかという と死出の旅をするのですから、足袋ですよと。ダジャレでちょっと笑いを取ったり。すると、悲しみの中にちょこっと笑顔が出たりしますね。まあ、あまり若い人の葬儀では笑いを取ってはいけないのですけれど。

六文銭も、これは三途の川の渡り銭で印が押してあるだけですけれども、十二文入れちゃうと帰ってきてしまいますから、六文だけですよと言って。戦場で真田幸村は常に死を覚悟して旗印に六文銭をあしらい、戦いに出たと話します。そうするとみなさん納得していただけます。

藤木　行事を通じて説明ができるというのはいいですね。その場でやっていることについての説明になりますから。

宮本　そうです。手甲脚絆、向こうずねが弁慶の泣き所と言って当たると一番痛いから、昔、兵隊さんはゲートルを巻いたという話もします。持ち物が揃い、棺に収まると納棺諷経に移り、棺を清め、みなさんで合掌礼拝をします。故人の最期の身繕いを親族縁者の方々が皆で整えます。

乗炬の式と松明

宮本　私は葬儀にも意義を持たせたいということで、いわゆる乗炬（じょうこ）の式でちょっと変わったことをやっておりまして。

藤木　どんなことでしょうか。

宮本　松明はふつう、棒に赤いきれが巻いてあるだけですね。ところが私が作った松明は、LED電球付きで、スイッチを入れると火がついたように見えるのです。これを堂行が導師のところに持ってきます。二本あって、一本は堂行が持っていて。私が持ったら葬儀屋さんに電気を消してもらいます。それで乗炬をやるのです。暗いところで本当に火が燃えて見えます。葬儀が終わるまで炎が揺れて幻想的です。私が作ったオリジナルです。

藤木　すごいですね。

宮本　きれいでしょう。演出も大事です。意義を持たせるのですね。今から点火して、ご遺体に火をつけますよということが子供でも分かります。ずっと棺の横でこれが燃えていますから。

藤木　アイデアですね。やはり葬儀は視覚的にも大事ですよ。

宮本　葬儀は仏教に近づく、本当に大事な時です。これを粗末にしたら、お坊さんとして何の価値もないです。「葬式坊主」と言われても、されど葬式ですよ。

藤木　そう思いますね。

宮本　死と向き合う、そして仏教と向き合う一番大事なところです。年忌や法事は心の扉が閉まっていますから、参列者の方々もさほど感じませ

宮本利寛師

ん。「和尚さん、そんな難しいお話よりもっと面白い話をしてよ」っていう程度。

でも葬式の時は違います。お通夜とお葬式は心が柔らかくなって、受け入れる扉が開いている時です。だから何を言っても聞いてくれます。そこに入っていかなきゃいけません。親父を何とか送りたいとか、いいところに行ってもらいたいという気持ちは皆さんあります。だから葬儀をやるわけですから。そこを粗末にしちゃいけません。

藤木　そうですね。

宮本　ですから納棺も粗末にできません。「くそばばあ、姑が本当に憎たらしい」と思って、死んでくれて良かったなと思ったけれど、顔と手と足を拭いた時にはやっぱり涙が出る。「ああ、こんなこと言っちゃった、ごめんね」と言って足を拭く。本当にここが一番大事です。

藤木　考えてみると一番、懺悔できる時ですね。

宮本　通夜・葬儀の翌日は、早朝の出棺、骨上げが終わり、そのまま菩提寺に来てもらい三日法要・初七日法要とご先祖の位牌を出し本堂で行います。ですから通常の葬儀のように二日間要します。葬儀屋さんが推奨する一日ですべて終わる簡素化した葬儀とは違います。

花まつりをもっと盛大に

宮本　もう一つ、仏教界がもっとやらないといけないのは「花まつり」ですね。

藤木　お釈迦様のお誕生日ですね。

宮本　クリスマスは全国民、世界中でやっていますけれど、お釈迦様の誕生は未だにあまり盛大になりませんね。

藤木　なりませんね。

宮本　これはやはりメジャーとか経済界、お菓子屋さんなどとも結託して商魂と結び付かないといけません。クリスマスは商魂と結び付いて、あれだけ世界中に広まっています。四月の八日が「花まつり」だと、いま知っているのは六十、七十代の世代だけです。今の若い人に「四月の八日は何の日？」と聞いてもわからないですよ。だから、これを周知徹底することが仏教界の一番大事です。仏教界全てが一丸となって、四月の八日を「花まつり」として、例えば両親に花を贈るとか、何かと結び付けて、一大キャンペーンをやらなければいけません。

いくら旧暦から新暦になろうと、四月の八日イコール「花まつり」。これをまずは曹洞宗だけでも統一して、全国どこでも「花まつり」があって、お釈迦様の誕生日をお祝いしている。どこのお寺にも花御堂がある。あと何か子供たちにお菓子を配るとかがあればいいですね。言葉は悪いですが、我々お坊さんはお釈迦様で飯食わせていただいているのですから。

藤木　そのとおりですね。

宮本　韓国は「花まつり」を盛大にやっているそうですが、どうして日本がそれをできないのか。四月の八日だとちょうど子どもたちの入学式と重なりますから、例えば四月の八日から五月の八日までひと月の間を「花まつり」月間にするとかでもよいと思います。うちのお寺では毎年四月の八日に花御堂をつくって、檀家さんに甘茶を配らせていただいています。日本の仏教界も統一してキャンペーンを打っていかないといけませんね。

「坊主も人間」ではなく、「人間が坊主」

宮本　最後に一言。よく「坊主も人間」だというふうに言われますね。そしてお坊さん自身も「そうだね」と思う人が多いですよね。ただ、「坊主も人間」というのは慰めで言ってくれているのであって、やはりお坊さんは甘えてはいけないと思うのです。反対に「人間が坊主をやっている」と考えなくてはいけないと思います。みなさんと同じ人間なのだけど、その人間がお坊さんやっているのですから、そこに価値を見出してください、と。若いお坊さんに言いたいのはそこですね。「坊主も人間だ」じゃなくて、「人間が坊主をやっている」と。その自覚が今、お坊さんに問われているというのが、私の思いです。

藤木　全くそのとおりですね。今、時代が揺れ動いていますから、曹洞宗はそうしたお坊さんを育てて、御本山も立ててもらいたいなと思っています。けれども、そういった動きもあまりありませんね。両本山も宗務庁もですけど、このままでは絶対に弱くなりますね。団体として落ちていきます。

宮本　いわゆる檀家制度という問題。これにあぐらをかいていまだに努力をしない。お葬式で檀家さんに言われて当たり前の流れみたいに葬式をやって、法事をやってということでは、やっぱり檀家さんは離れていきます。宗門一丸となって努力しなければと思います。

矢田海里（やだ・かいり）
ライター。主著に『潜匠 遺体引き上げダイバーの見た光景』がある。

これからの寺族へ

それぞれの「寺族としての仕事」

寺族得度から三十一年。「ここに来れて幸せ」

松樹英子さん（大分県杵築市・宗玄寺）

立派なアジサイが咲き誇ることで知られる宗玄寺。約三〇〇株ものアジサイは、カメラを片手に訪れる訪問者や地域メディアの取材など、毎年多くの人々を魅了している。また、秋の始まる九月になると、お寺を彩るのはフヨウの花だ。今度はわたしの番よと言わんばかりに純白や薄ピンクの花弁がふわりと広がり、約二五〇株から可憐な姿を見せてくれる。こうした〝宗玄寺名物〟も、ほんの三〇年前には存在せず、花を愛でにお寺まで来る人も今のようにはいなかった。当時、殺風景だった敷地に「せめてきれいなお花を」と植えたのは、住職の妻・松樹英子さんだ。「お花を楽しんでくれる人がいるのは本当に嬉しい」と語る英子さんは、商社に勤務していた夫・松樹弘隆住職が宗玄寺を継いだ平成三年、住職と共に福岡県から宗玄寺へ移り、寺族得度を受けた。

信仰深い父の影響で幼少期から毎日お経を唱えて育ち「仏教には小さい頃からご縁があった」と語る。寺族になってからは「もっと檀家と仲良くなりたい」と感じた。「気心を知り、信頼関係を築き、さまざまなお寺の活動も一緒にできるように」と考えて、自分にできることに努めてきた。前述のアジサイやフヨウも、お寺に来るきっかけ作りを考えて、少しずつ植えたのが始まりだった。もともと前向きな性格で、初対面の人とも話ができる。引っ込み思案ではない性格を活かし、寺族としての勉強にも積極的に取り組んだ。そのひとつが梅花流詠讃歌の資格取得だ。寺族になった当時、大分県には梅花寺族会がなかったため英子さんはその立ち上げを行う。そこで始めたのが梅花の会だった。お釈迦様の心を受け継いだ摩訶迦葉にちなみ「微笑会」と名付けた会は、同じ地域の寺族同士をつなぎ、有意義な情報交換の場にもなっている。創立以来約十五年間、毎月一度の集まりを欠かさない。さらに英子さんは、宗玄寺でも一般向けの梅花の会を始めた。檀家に限らず誰でも参加可能で、毎回顔を合わせるうちにコミュニティに進化した。「梅花がつなぐご縁が確実に広がりを見せている」と感じている。

寺族としての英子さんを語るとき、もうひとつ欠かせないものがある。福岡在住時に始めた自家製パンだ。三種類の粉をブレンドしたこだわりのおいしさが評判を呼び、自宅を開放したパン教室に発展。「宗玄寺に来た翌月には、お寺でもパン教室をしていました」。新しい住職を迎えて、新しい宗玄寺の在り方を伝えたのは、アジサイよりも先に焼きたてのパンの香りだった。パン教室では冒頭に、住職からの法話の時間をもつ。仏教の視点から食の大切さに触れることで、パンを焼く経験も想像以上に人々の心に響き、お寺や仏教を身近に感じてもらえる。パンをきっかけにしてお寺に通うことが増えたり、パンだけではなく梅花を始める人もいるなど、これまでたくさんの人の変容を見守ってきた。英子さんは今も連日パンを焼き、法事にパンをお供えをしたり、納骨に来た人に渡したり、熱心に手伝ってくれる檀家に贈ったりしている。「喜んでもらえると嬉しい」という行動力は、想いや感謝を英子さんらしく伝える手段でもあるようだ。

宗玄寺

アジサイとフヨウ、梅花にパンづくり。いずれも「計画的ではなく、自分にできることをしてきただけ」と話す。寺族の仕事は幅広く独特で、寺族の仕事が影響する範囲も大きい。「都会と違って檀家との関係性も近いからこそ、お寺が孤立することがないように」と努める英子さんの経験談を聞き、寺族が架け橋であることを実感した。山寺からは今朝も、地域をつなぐ鐘の音が響く。

「何も知らずに」初めて触れた仏教の世界

中村昌子さん（埼玉県東松山市・曹源寺）

間もなく創建四〇〇年を迎える曹源寺は、行事や整備などたくさんの関連事業が進行中だ。中村瑞峰住職の妻として寺族になった中村昌子さんは当時を振り返り、「仏教について何も知らないままお寺に来たんですよ」と朗らかに語る。ピアノ講師だった昌子さんと住職を引き合わせたのは、ピアノの生徒の保護者だった。新しく曹源寺に入った弥勒菩薩像を「一緒に見に行こう」と誘われて、初めてお寺に来てから三十四年。片足を他方の膝に乗せて座る美しい弥勒様に続いて、仏教に接する機会はほとんどなかったという昌子さんが、古刹に新しい風を吹き込んだ。

不安はあったが、義母は「普通のご家庭と一緒だから、ご飯が炊ければ大丈夫よ」と、優しく迎えてくれたと言う。「とはいえ電話や来客の対応に慣れるまでは大変でした」。檀家の法事などに限らず、地域との関係性が近い曹源寺を訪れる人は日常的に多い。名前と要件をちゃんとメモしたつもりが、同じ地域に同じ苗字の檀家が多いため、どこの誰か伝わらないと言われたこともあった。「特徴を伝えたり真似したりして、必死でした」と笑う昌子さんは、確かにこちらが安心して話しやすい空気を兼ね備えた女性だ。当時からきっと、昌子さんだからこそ、ついつい話してしまう人が多かったのだろうと容易に想像できる。「お寺に来ることの敷居は低くできていたかもしれませんね」と謙遜するが、訪ねやすいお寺であること、それは寺族として重要な務めを早くも果たしていたのではないだろうか。檀家の中には話しの流れから、自身の出自や最近の体調、世代によっては戦争体験を教えてくれる人もいる。貴重な話でもあるのでメモしておいたり、後で住職に伝えることもある。「お話くださった方が亡くなられると、ご葬儀で住職から話してもらうこともあります。戦争の話って、普段なかなか家族としないので、初めて知るご遺族も多いんですよ」。

また曹源寺は、人が集まる行事も多いお寺だった。特にコロナ禍になる前は、週末の坐禅会に加えて、写経会、施食会、講演会、落語会、花祭り、秋彼岸の展覧会など、年間を通して地域の老若男女が友人・知人を連れて訪れる。何かしらの縁でお寺の名簿に名前が載った人には、檀家への案内と同様の郵便物を発送している。曹洞宗に関する冊子、住職からの言葉、催し事のお知らせなど、とにかくお寺からの発信を切らさない。これは住職の「中でどんなことをしているのかわからないと、お寺には来にくいもの」という考えから続けていることでもある。お寺に初めて来る人の気持ちがわかる昌子さんは、住職のイメージするお知らせ内容をパソコンで制作する等のサポートと共に、発送作業を行なっている。本誌や『曹洞禅グラフ』も、曹源寺の取扱部数がかなり多いことを伝えると、最近は特に「仏教を知るきっかけにしてくれた人や、もっと仏教を知りたいと行動し始めた人が増えているように感じる」と教えてくれた。特に写経会には檀家以外の人も多く、郵送作業の大変さはあるものの、これからも工夫しながら発信を行なっていくと言う。十年ほど前、県内に宗務所の寺族会ができたことをきっかけに得度した。すでに寺族として二十年ほど実務を行なってきたが、戒名を授かり、改めて「背筋が伸びる思いでした」と話す。「お寺の立場だけで考えないようにしたいと思っています。例えばお彼岸やお盆のことを〝お墓参りに来る時〟と捉えたら、それは少しお寺中心の考え方だと思うんです。一般的にはお盆休みや連休であることを先に連想するでしょうし、忙しい中でも休日にお墓参りにいらっしゃる方々の感覚を忘れずにいたいです」。寺族になりたての頃は、「いつ休憩していいかもわからないほど緊張しっぱなしだった」と言う昌子さんだが、最近は修行から戻ったご子息が活躍していることもあり、時間にゆとりが増えてきた。今度は曹源寺から、ピアノの音色が聞こえてくるかもしれない。

曹源寺

柳澤 円（やなぎさわまどか）
ライター、編集、翻訳マネジメント。食・農・環境問題をテーマにした取材執筆で複数媒体に寄稿するほか、企業や団体での制作や広報を担当。株式会社Two Doors代表。

諸岡さんインタビュー

旧統一教会問題 仏教に何ができるか

安倍元総理の銃撃事件以降、大きく取りざたされる旧統一教会の被害。仏教は何ができるのか。自らも被害者であり、脱会活動を通して被害者を支えてきた諸岡茂樹さんにお話を伺った。

諸岡茂樹さん

救済の活動について

藤木　旧統一教会の被害者を救済する活動をされておりますが、簡単に教えてください。

諸岡　いわゆる反カルトに対応している組織は、私が関わっているもので三つあります。一つは私の妻がかつて入信していたカルトである統一教会の被害者家族の会です。三カ月に一回、メールや電話で悩みを持っている家族の方や入信した当人が、脱会したい、させたいというときの相談場所で、牧師やカウンセラーとともに活動しています。

もう一つは霊感商法対策弁護団。統一教会というのは極めて金銭的に収奪するという面があるので、弁護士を通じて請求することが大きなポイントとなります。

三つ目の脱カルト協会のメイン活動は大学への働きかけです。学生が大学で勧誘を受けて入信というケースが非常に多いので、各大学に注意を喚起する活動です。彼らは「サッカーのサークルがあるから、入らない？」など、最初は正体を隠していることが多いのです。

被害実態とは

藤木　入信してしまった人の、実際の被害を教えてください。

諸岡　実は金銭の損害がどのくらいかというのは、信者当人でないと見えない部分があります。本人が脱会しないうちは、外側からはなかなか見えません。まず第一に当人をどう脱会させるのか。脱会したら、どれだけのものを購入、寄付したというのが分かってきます。

私個人の場合は、たまたま妻が脱会して預金通帳が残っていました。メッコールとかビタミン剤、水道の浄水器だとか、とにかくいろいろ買わされます。合計で四千万円ぐらいだったかな。交渉で七割ぐらいは返ってきましたね。

脱会の相談

藤木　入信して脱会したいというのはどういう理由から出てくるのでしょうか。

諸岡　脱会したいというより、脱会させたい方が多いです。来るのは信者当人よりも、周囲の家族です。例えばおばあちゃんがご主人を亡くして財産相続しますと、金銭的にも相当なものになります。それを狙われる形で入信してしまう。あとは子どもが入ってしまって、それに対して家族がどうしても脱会させたいなどです。

脱会の難しさ

藤木　脱会させるのは、かなり難しいのでしょうか？

諸岡　難しいですね。ひと昔前まではメインの解決の方法としては拉致保護で脱会させるということがありました。相手も人を送り込んで引き留めに来ますから、入信した人をマンションで隔離して、外部との連絡を断たせるわけです。私自身も妻が入信した時期がありましたので、当時、支援の会に相談したことがありますが、「あなたは仕事を辞めなければいけない」と言われました。当人をマンションの部屋に置いて、家族が説得して、場合によっては牧師が来るという形ですから、一カ月ぐらいで済めばいいですが、一、二年もかかるかもしれない。仕事を抱えていると、とてもできないです。中には仕事をやめて脱会に専念する人もいるわけですから、簡単に被害と言っても、お金だけではありません。

ただ、いまは、監禁のようなある種の強引な脱会はできなくなってきています。脱会者当人がストレスを感じるというマイナス面がありますから。話し合いながらという方向になりますが、最初から牧師やカウンセラーが行くと、向こうもガードしてしまいます。なので家族同士の話し合いから入りますが、その家族の側も全く知識がないとコミュニケーションが取れません。しっかりと予備知識をマスターしてから臨むので、時間も労力もかかります。

入信の理由

藤木　信者たちはなぜ入信してしまうのでしょう？

諸岡　一つには、その人なり家庭なりに何か不幸があった時に、それがきっかけになってしまうということです。私の場合は、上の子どもが心臓に欠陥がありました。それで奈良に天理教のやっている有名な病院があって、その病棟で統一協会の人と一緒の病室だったみたいです。結局子供は亡くなってしまったのですが、その精神的なショックもあって、妻が感化されて入ってしまいました。

最近、相談にいらした別の女性は、もう三十年くらい前ですが、母親が入信したそうです。そのときやはり、弟さんとおばあさんが入院するということが重なったようですね。

霊感商法はそうした不安定な時期を狙って、亡くなった人がいい霊界に行けるようにとか、ご先祖が供養されていないからそれがご家族の苦しみになっている、供養しましょうとかでいろいろ買わされてしまったりするわけです。

もうひとつは結婚ですね。統一教会は合同結婚式が有名です。要するに統一教会に入れば、結婚できるということで人を集めるわけです。

鶴岡で入信してしまった四十代の女性がいまして、ご両親がどうしても脱会させたいというので、私も鶴岡に通っていました。お母さんと一緒に彼女の部屋に入っていくと、「結婚して日曜日には必ず休みをとって主人と一緒に遊びに行きたい」と書いてありましたから、教義、宗教心ではないですね。結婚願望です。

ただ、最初は結婚願望でもそのうち教義を信じるようになるということもあります。合同結婚式をすると罪がなくなるというような教えがあるので、合同結婚式に向けて信者は頑張るわけです。特に若い方の場合、合同結婚式で結婚して、そのあと子供ができたりすると、なかなかその段階では脱会が難しいです。

あとは、お年寄りなんかだと、単純にやさしくしてくれるというのもあると思います。息子でも娘でも、親に対してすんなり良い関係ばかりではない。それと比べると教会の人はいろいろやさしくフォローしてくれるので、そのあたりから入っていくというケースが多いです。教義というよりも、人間的なつながりで入っていく。これだと割合脱会も簡単にできることもあります。

献金のしくみ

藤木　お金の被害というのは、やはり顕著ですか？

諸岡　彼らはとにかくお金がメインです。私は宗教というよりも詐欺団体だというふうに見ています。この世の中のものはみんな神のものだという教えです。だからそれを個人の懐ではなくて神に授けないといけないと。それがいわゆる献金です。

私は向こうの教会に入って講義も受けました。その教えは例えばこうです。人間がいて、川の流れているところに住んでいる人と、池のそばに住んでいる人がいる。さて、どちらに住むべきかと。彼ら曰く、池のそばだと水は動いてないから、人間も駄目になると。川のそばは水がずっと動いているので、そこに住んでいた方が人間にとっては非常に良いと。だから、お金もそうして回っていかないと駄目なんだと。

先祖が霊界で非常に苦しんでいるから解怨しなければいけない。それがどうして献金につながるのか、いまいち私も分からないのですが、とにかく献金が必要なんだと。献金すれば霊界の苦しんでいる人も苦しまなくなるし、必然的にあなたも苦しまなくなる。そうやって微妙にコントロールして、要は自発的に献金するわけです。したくなるような世界観をつくられちゃうという、そういう感じがしますね。

「脱会」とは

藤木　脱会とはどういう状態を指すのでしょう？

諸岡　脱会とは何かというと、それまではマインド・コントロールされて、カルトの教えに頭の中を支配されていた状態から、自分自身で考えることができるようになるということです。そのことがイコール脱会です。

ただ、何がきっかけで脱会したのかは、当人も分からないのです。うちの妻もカウンセリングを受けていました。その過程で何となく一つのことに疑問を持って、すると頭の中の世界がいっぺんにガラガラと崩れるというのかな。「何で私こんなことをやってるのかな」とふと思ったときがあって、そのあたりから考えが変わって脱会に至ったようです。

他の脱会者のケースも、統一教会に入っていた時期でも一〇〇パーセント心酔ということはなくて、「何でこんなにお金出さなければいけないのか」とか考えることが多々あるようです。相談員はそのあたりを上手に「いやあ、お母さん、そうじゃないんじゃないの？」ぐらいの塩梅で対応していると、多少は自分なりに考える部分が増えてくるようです。ただ、こうやったら崩すことができるというマニュアルはないので、論理的に追求してもダメですね。とにかく相手の意見を聞くことがメインで、脱会のプロセスも人それぞれです。

仏教と社会の問題

藤木　今のお話を聞いて、私は仏教がなすべき立場があると考えました。仏教から見た自分というものをしっかり伝えていかないと、カルトに対するカウンターがないですから、まさに言われるままになって、彼らが世界の真実を言っているように受け取られてしまう。その意味で仏教界側にも責任はあると思います。あまりにも世界観なり、仏教観なり、生き方なりを伝えなさ過ぎる。普段、人間が生きていく上で自分の指針になる教えを学ぶ場として、役割を担うべきだと思っています。

諸岡　そうですね。日本の場合は、戦前の神道の教育で戦争に突き進むなど、弊害が出て以後、宗教教育を全くやっていませんね。科学的に宗教を見るということがほとんどなされていないと思います。世の中の人はカルト宗教に身近な人が入信したらどこに相談に行くか。金銭的な面だと警察に行ったり、宗教的な面だとお寺の住職に相談に行くとか。ただ、その相談を受けるほうが「いや、分からないです」と、中途半端な対応をしてしまうと、余計被害が拡大するという懸念もあります。

脱会活動の牧師の役割

諸岡　脱会のカウンセリングの現場には、キリスト教の牧師もいます。統一教会の教えはキリスト教がベースになっているので、信者に脱会の説得をしていて、教義の話になると、私もキリスト教を学んでないので分かりません。そこはやはり牧師さんの力が必要です。

藤木　そういう一員の中に仏教界も入って、仏教の説き方というものを言える体制をつくっておかないといけないと考えています。

諸岡　そうですね。仮に統一教会がなくなったとしても、今後、オウムのように仏教的なカルトは必ず出てきます。仏教の専門家の相談員が必ず必要になってきます。

教理へ踏み込む

諸岡　相談員の充実も大切ですが、私は根本の問題は教理にあると考えています。つまり、この世の中は全部神のものなんだ、文鮮明は救世主、キリストの再来なんだと。霊界で先祖が苦しんでるだとか、そういった教えに基づいて、献金があって具体的な被害が出てくるわけです。

仮に法人格を統一教会から取っても、教会自体は残るわけです。その教え、教理にまでタッチしないといけないと私は考えています。宗教の自由というのはたしかにありますけれども、一方でやはり教理自体に問題がある。

藤木　本当にその通りだと思います。お釈迦様はむしろこうしたものを戒めたわけです。世は「諸行無常であり諸法無我」とお釈迦様は説かれています。私達一人一人は自立できるまでは両親や祖父母、親戚、友人など多くの方の影響を多く受けながら成長していきます。その後は一人一人がそれぞれの人生修行を積み上げながら成長していきますから、「先祖の霊が成仏していません」という考えや教えは仏教にはありませんから、仏教の基本の教えが皆さんに伝わっていないことが問題です。

仏教にできること

藤木　いろいろとお話をお伺いしてきて、我々曹洞宗としてもできることを見出さないと、と考えています。

諸岡　いま家族の会を、カウンセリングを設ける形で、三カ月に一度やっています。今のところ、そこは統一教会への対応がメインです。ただ仏教的なカルトというのは必ずこれからも出てきますので、そうした相談が来たとき、個人的に対応をしていただくとか。

藤木　相談の現場に出るということですね。

諸岡　相談会の事務局がありまして、様々な相談の内容を聞いて、誰のところにカウンセリングを持っていくのかというマッチングを彼らがします。仏教系のカルトの場合は、キリスト教の牧師よりも、仏教者のほうが何かと深くアドバイスすることができると思います。例えばご住職に相談して、それでご住職がその人をカウンセリングするとか。

藤木　そうですね。我々が当然そこに関与していくべきだと思います。

諸岡　対応はこれまで牧師しかやっていなかったですから。カウンセリングでどうやってその人を救うのか。入っている人間をどうやって脱会させるかということですので、宗派はあまり関係ないとも言えます。宗教の専門家でもない私だってできるわけですから。個の力ということですかね。

藤木　曹洞宗でこうした問題についての相談窓口をやるとなると、勉強もしなきゃいけません。しかるべき先生に来ていただいて勉強会をやる。個人的勉強会か、宗門としてきちんと立ち向かうべきではないかという動きを作っていく。やるとすればその二通りです。

矢田海里（やだ・かいり）

編集後記

藤木隆宣

私の本務地、世田谷区北沢にある永正寺では、哲学者の内山節先生をお迎えして寺子屋を開催して一年になる。二〇二二年一月から毎月一回、日曜日の午後二時から五時三十分まで、リアルとオンラインで実施している。編集後記の左側に二〇二三年度の予定表が出ているので、寺子屋の内容はご想像頂きたい。

この会にほぼ欠かさず参加されておられた岩佐さんが、舞踏練習の途中に心筋梗塞で亡くなられたと寺子屋の代表の谷口さんから連絡があり吃驚した。本人はリアルで、ご主人はズームで参加されておられたのでご主人にはまだお会いしていなかった。

奥様がこのようになられる前から、ご夫婦で葬儀はそれぞれが納得いくようなものにしようと話し合っておられたようだ。そこで谷口さんにも相談して二月五日の寺子屋で岩佐さんをしのぶ供養をしようということになり、岩佐さんも学んだ修証義をリアル会場にいる参加者たち二〇人と読経し供養させていただいた。寺子屋が終わり、岩佐さんが休んでおられる西国立の個別安置室に数人で向かった。あらかじめ十九時ごろとご主人に伝えてあったので初めてお会いできた。もの静かな落ち着いたご主人は、私たちや奥様の寺子屋での立ち居振る舞いをしっかりメモを取っておられ、わからないところは質問をしておられた。

火葬は二月十日とのことだった。伝統的な葬儀を知らない人たちにとって葬儀は、自分が納得のいくかたちでやりたいようだ。岩佐さんは今後どのような形で供養をされるかはわからないが、お寺との関係がない方々にどのようなご縁を結んでいくかはお寺の大きな課題ではないかと強く感じた。お檀家さんとの関係は葬儀、法事だけではなく、お寺はいつでもご相談に乗れる姿勢が必要だと感じる。オーム真理教事件が起きた時に「お寺は風景に過ぎない」と言われたが、『曹洞禅グラフ』一六四号及び『仏教企画通信』七一号で取材させていただいた方々は伝統仏教のお寺に相談できる体制を強く望んでおられる。

今の状況は、お寺に相談したいが、お寺にはその体制がないから相談しようという発想すら生まれないようだ。誠に残念なことだ。今後、私たちはお寺を「風景」からさらに「遺産」にしてはならない。『SOUSEI』一九九号では「僧侶に求めるリアル」を特集している。世間と向き合うことができるかどうかは、軸足を僧侶側に置くか世間に置くかで決まる。当然世間に置くべきだと考える。今のままで軸足を世間に移すだけでいいのではないか。それだけでお寺への見方が変わるはずだ。

曹洞宗を日本のなかで必要不可欠な組織にしなくてはならない。

2023年度 内山節先生の寺子屋

開催予定

「信仰と宗教」

仏教は信仰なのか、
宗教なのかを問いながら

4月2日「宗教と政治」
ウクライナへの侵略を支持しつづけるロシア正教、信仰が宗教になり、教団が支配するも担ったとき、宗教には何が起きていたのか

5月21日「中国の宗教と国家」
国家、国王の存在を前提にした宗教としての儒教、老子の道教もふくめて、儒教国家が生みだした現実

6月18日「仏教における信仰と宗教」
神信仰の社会に入ってきた宗教としての仏教。国づくりに仏教が使えると考えた古代国家。呪術宗教の役割。民衆の仏教信仰との対立

7月9日「土着信仰と仏教」

9月3日「鎌倉仏教と武装した共同体」

10月1日「民衆信仰と阿弥陀信仰」

11月12日「民衆仏教の系譜について」

12月10日「民衆は仏教に何を感じたのか」

2024年

1月14日「共同体の信仰、個人の信仰」

2月18日「信仰と宗教の相違について」

開催地：曹洞宗 永正寺
東京都世田谷区北沢2-39-6 下北沢駅 徒歩5分

参加ご希望の方は、
仏教企画までご連絡ください。

手まり学園

寄附者御芳名（敬称略）
R4.10.17～R5.1.1

所在地	寺院名（個人名）	金額
東京都	石井友子	5,000
神奈川県	青木義次（110）	5,000
神奈川県	甲斐芙佐子	10,000
東京都	石井友子	5,000
群馬県	祥雲寺	10,000
神奈川県	青木義次（111）	5,000
山口県	宗教法人久屋寺	10,000
東京都	石井友子	5,000
神奈川県	青木義次（112）	5,000
合計		60,000

てまり学園にご支援をいただき
誠にありがとうございます。

仏教企画発行の刊行物

（★部数により割引があります） すべて税別価格です

『修証義』解説	丸山劫外著	1,400円★
『うたい継ごうよ、子守唄』	長田暁二・西舘好子共著	1,200円★
『まんが問答一期一話』	文 平和宏昭 まんが 垣内敬遠	1,200円★
『葬送のしおり』	長井龍道著	30円
修証義読本『生老病死』	須田道輝著	500円★
『曹洞宗檀信徒経典』	須田道輝解説	300円★
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』	霊元丈法著	140円★
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』	霊元丈法著	150円★
俳句随想 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って		500円
『観音の咒 大悲心陀羅尼』	渡辺章悟著	500円
『宗教人類学の地平』	佐々木宏幹編著	2,300円

＊『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。（消費税、送料別）

曹洞禅グラフ

発行日	
春 彼岸号	2月10日
夏 お盆号	5月30日
秋 彼岸号	8月20日
冬 正月号	10月30日

1部 200円

9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

宗教人類学の地平

佐々木宏幹先生が『仏教企画通信』に
執筆された玉稿より収録

佐々木宏幹編著
（駒澤大学名誉教授）
A5判上製・263頁
（別冊:A5冊子63頁・
「写真が語るシャーマニズム」付き）
本体2,300円+税

仏教企画刊

お申込み
仏教企画
〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
TEL: 042-703-8641 FAX: 042-782-5117 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp
※ご寺院名後の番号（3桁もしくは4桁）がお客様番号（コード）になります。
お申込みは ①ご寺院名 ②お客様番号 ③電話番号でも可能です。